

おおきいツリーちいさいツリー

バート・バリヤー／作 光吉夏弥／訳
大日本図書 (2000.10)

あるお屋敷にツリーが届きました。大きくて立派なツリーでしたが、少し大きすぎたので、ぱっさり先がちょんぎられます。

切り取られた先っぽは小間使いのツリーになりますが、これまた少し大きすぎたので、ちょんぎんと先がちょんぎられ、その先っぽは庭師のツリーになります。

それから、大きすぎたその先はくまのツリーになり、その先が今度はきつねのツリーになり…。

人間も動物もみんなが祝うクリスマスの喜びが1本のツリーを通して描かれています。繊細なタッチの挿絵は、ながめているだけでも楽しく幸せな気分させてくれることでしょう。



おぼけのてんぷら

せなけいこ／作・絵
ポプラ社 (1975.2)

食べることが大好きなうさこは、山でお弁当を食べているこねこくんに会いました。てんぷらを味見させてもらい、作り方を聞いて自分でも作ってみることにしたうさこ。てんぷらをあげていると、山のおばけがにおいに誘われてやってきました。おぼけはてんぷらを揚げているうさこの横でつまみ食いを始めます。

すると、油ですべったおぼけは衣の中にぼっちゃん！おぼけはいったい…！？

料理方法やおぼけといった読み手の興味が広がる要素のつまった絵本です。絵は貼り絵で構成するカラー・ジュ手法で、紙のもつやわらかさが伝わってきます。

てんぷらの作り方が丁寧に描かれているので、読み終わったあと、てんぷらを作ってみたくなるかもしれませんね。



ちょっとだけ

瀧村有子／さく 鈴木永子／え
福音館書店(2007.11)

弟ができ、姉となった幼い女の子の心情を柔らかな絵と色彩で描いた作品です。

なっちゃんがママと手をつなごうとしても赤ちゃんを抱っこしているのでできません。牛乳が飲みたくても、着替えようとしても、ママは赤ちゃんのお世話で忙しそう。でも、ママがいつもしてくれるように、なっちゃんが自分でがんばってみると、「ちょっとだけ」できました。

眠たくなったなっちゃんが、ちょっとだけでいいから抱っこしてほしいというとママは笑顔で応えてくれました。

「いっぱいだっこしたいんですけど、いいですか？」

お母さんへのいたわり、姉になったという自立と自覚、そんな子どもへの優しいまなざしが伝わってきます。

子育てに少し疲れたとき、特にお薦めです。



どうぞのいす

香山美子／作 柿本幸造／絵
ひさかたチャイルド (1981.11)

うさぎさんが小さないすを作って、大きな木の下に置きました。その横に「どうぞのいす」と書いた立て札も立てました。

ある日、ろばさんがやってきてどんぐりのかごを「どうぞのいす」に置いてお昼寝をします。そこへ、くまさんがやってきていすの上のどんぐりを見ると「どうぞ」ならば遠慮なくいただきますよと、どんぐりをみんな食べてしまいました。後の人が気の毒に思ったくまさんは、かわりに、はちみつのびんをいすの上に置いていきます。すると今度はきつねさんがやってきて…。さて、お昼寝から目を覚ましたろばさんが見たものは、何だったのでしょうか？

やさしい心がどんどんつながっていくお話です。色合いは温かく、秋にぴったりの絵本です。



なつのいちにち

はたこうしろう／作
偕成社（2004.7）

暑い暑い夏の日。真っ白な陽射し、青い草の匂い、響き渡るセミの声。麦わら帽子をかぶり、クワガタのいる山をめざして一心不乱に走る「ぼく」。



「きょうはぜったいにつかまえるぼくがひとりてつかまえる」少年の小さな冒険を、短い文章と躍動感あふれる絵で描いた作品です。その構図の巧みさ、色彩の美しさ、読者は目を奪われ、まぶしい夏へといざなわれることでしょう。

ページの中からあふれ出す「夏の音」にワクワクするのは、きっと子どもだけではないはず。

男の子だけでなく、女の子も、かつて子どもだった大人たちも…「ぼく」と一緒にキラキラ輝く宝物のような「なつのいちにち」を体験してください。

はじめてのおつかい

筒井頼子／作 林明子／絵
福音館書店（1977.4）

みいちゃんは5つです。ある日ママが言いました。「みいちゃん、一人でおつかいできるかしら」



初めてのおつかいにドキドキのみいちゃんが、緊張しながらも無事おつかいを果たすまでを描いています。

子どもたちは、みいちゃんと自分の生活経験を重ねながら、みいちゃんと一緒に頑張ってドキドキ・ハラハラしたり、ホッと安心したり…。大人は、初めてのおつかいへと我が子を送り出すママの心情を自分自身と重ね、またみいちゃんの一生懸命頑張るひたむきな姿にホロリとしてしまいます。

親子で共感できるこの絵本は、林明子さんによる細かい描写、温かみのある素朴な感じの絵もすてきです。絵をじっくり見てみると、あちらこちらに林さんの遊び心が…。そんな発見もまた楽しい絵本です。

めっきらもっきら どおんどん

長谷川摂子／作 ふりやなな／画
福音館書店（1990.3）

「あそぶともだちがだれもない」お宮までやってきたかんたは大声でめちやくちゃの歌を歌います。「ちんぷく まんぷく…めっきらもっきら どおんどん」とたんに風が吹き、奇妙な声が。



のぞき込んだご神木の穴に吸い込まれたかんたは、不思議な世界で3人の妖怪に出会います。おかしな3人と思う存分遊んだかんた。遊び疲れて心細くなり、思わず「お・か・あ…」と叫びます。すると…

想像の世界で遊んだあと、最後には安心できる場所に戻ってくる。これはファンタジー絵本の大切な要素のひとつです。

言葉にも物語にもリズムがあり、躍動感のあるユーモラスな絵も魅力的。子どもたちは自然と物語に引き込まれ、かんとと一緒に不思議な世界を満喫することでしょう。

＜編集委員のつぶやき＞ 私の息子が幼い頃、毎晩の

ように絵本の読み聞かせをしていました。その数はン百冊にも上ります。よくもまあ毎日飽きずに聞いてくれたものです。そのうち息子にもお気に入りの1冊ができ、同じ本を何度も何度もせがまれ、こちらも「将来、何かの役に立つだろう」と願いつつ、根気よく読み続けました。それは、「ももたろう」や「かぐやひめ」などのような有名なむかしばなしでもなく、長年読み継がれている「はらぺこあおむし」（偕成社）でもありません。

先日、家族で何気ない会話から絵本の話になった時、突然息子が「〇〇〇〇～」と、当時自分が気に入っていた1冊の1節を口にししました。その瞬間、読み聞かせをしていた頃の情景が鮮明に蘇ると同時に、何とも言えない幸せな気分になりました。絵本の持つ魅力を改めて感じたひとときでした。